

ルポルタージュ
叢書 7

石原昌家 皇軍と臣民の末路

虐殺の島

伊豆名島には、日本軍の特務教員が配置されていた。
また、不時着した日本軍特攻機の飛行士が
数名かくまわれていた。沖縄戦が終局を迎え、
国頭方面から沖縄出身兵を混入した。八名の
敗残兵の二団が島に渡ってきた。
彼らは島を守りにきたのだと住民に告げた。
特務教員らは不時着して捕縛し、
殺害した。また、敗残兵らは、
日の丸の旗を米兵に売った。米兵は、
米軍スパイと見做され、
ふくめて数名殺害した。しかし、
実際には本当のスパイではなく、
デッチ上げだった。……本文より

晩聲社

1

皇軍と臣民

虐殺の身

末路

助
聖
社

伊是る處には、日本軍の捕虜が居る。
また、不明者大日本軍捕虜の報告を
数多くまわっていた。中絶戦が終結した
後方の面から、出身兵を捕らえて、八名
程度の囚人を連れてきた。
捕虜は日本に到着して帰った。

晩聲社

この丸の頭を米兵に売つた。そのローを
ふてめて数枚の紙で巻いた。それが、
軍隊に奉出のメデライオンとなつて
シチヤに渡つた。一オーストリア

著者 ■ いしはら・まさいえ ■

1941年台湾宜蘭市に生まれ。沖縄
県首里出身。1970年大阪市大大学
院文学研究科修士課程修了。現在
沖縄国際大学文学部助教授

主な著書『公害反対闘争の記録』
(編)『沖縄県史10—沖縄戦記録2』
(共同執筆)その他。

虐殺の島—皇軍と臣民の末路

ルポルタージュ双叢7

1978年1月31日 初版第1刷

著 者 石原昌家

装 幀 杉浦康平+鈴木一誌

発行者 和多田 進

発行所 株式会社 晩聲社

〒101 東京都千代田区神田駿河台3-2 山崎ビル

電話 (03) 255-4014

振替・東京 6-50696

印 刷 ミツワ印刷株式会社

製 本 ナショナル製本

* 定価はカバーに表示してあります。乱丁落丁はお取り替えいたします。

虐殺の島・目次

第一部 皇軍と臣民の末路 9

第一章 洞窟をめぐる 10

(1) はじめに 10

(2) 自然洞窟の避難場所 11

(3) 住民虐殺のうわさ 17

(4) 野戦陸軍病院系数壕の惨状―手記から― 19

(5) 洞窟の中の帝国日本 27

籠城への道／投降の拒絶／捕虜、住民をスパイ視／米軍の住民虐殺計画／
決死の壕潜入

(6) 「アブチラガマ」社会の崩壊 40

(7) 住民虐殺のうわさの真相 47

(8) 「アブチラガマ(系数壕)」調査 52

第二章 「セイファークタキ」の敗残兵 57

第三章 知念のスパイ虐殺 65

第二部 謎を秘めた虐殺の痕跡 71

(1) はじめに 72

(2) 供出米事件 77

(3) 特務教員とゲリラ訓練 80

- (4) 木谷軍曹の不時着 85
- (5) 敗残兵の伊是名島上陸 89
- (6) 敗残兵隊長平山大尉 99
- (7) 捕虜虐殺と米軍の調査 101
- (8) タブーの形成 105
- (9) 伊平屋の米軍と特務教員 108
- (10) 「他所者」差別とスパイ視 113
- (11) チナースーの虐殺 120
- (12) 奄美少年の虐殺と遺骨の行方 137
- (13) アメリカ軍の伊是名上陸 143
- (14) 敗戦と与論脱出 147
- (15) 特務教員宮城太郎の逮捕 150
- (16) 沖繩出身敗残兵 153
- (17) 特務教員西村 156
- (18) 駐在巡查 157
- (19) 結論 159

第三部 西表島の日本軍 163

- (1) 軍隊の内幕 164

- (2) 物資の欠乏 168
- (3) 軍の横暴 169
- (4) 西表駐屯部隊の再編 172
- (5) 伐採中止の談判 173
- (6) 命がけの勤勞奉仕 176
- (7) 船大工と資材をめぐる 178
- (8) 西表の、小野田少尉たち、 179
- (9) 住民救出作戦 184
- (10) 敗戦の情報 185

第四部 二人の証言者

I

- (1) 入隊 190
- (2) 出撃 193
- (3) 被弾 195
- (4) 病院移動 199
- (5) 彷徨 204
- (6) ハワイ収容所 210
- (7) 再会 212

Ⅱ

- (1) 沖縄師範学校入学 215
- (2) 入学そして軍事奉仕 216
- (3) 妨害された疎開 218
- (4) 南風原陸軍病院壕 219
- (5) 病院移動 222
- (6) スパイ視 225
- (7) 地図絵図 227
- (8) 学友の死 230
- (9) 投降 234
- (10) 孤児院 235

あとがき.....238

「虐殺の島」に寄せて.....243

虐殺の島

第一部 皇軍と臣民の末路

第一章 洞窟をめぐる

(1) はじめに

玉城村、知念村ちねん一帯は、日本軍にとって、米軍上陸予想地点に備えた迎撃基地であった。日本軍が米軍の上陸地点に想定したのは、実際に上陸を敢行された北谷村のほかに中城湾ちゅうじょうわんと具志頭村ぐしづつむらの港川方面を考えていた。したがって、中城湾防備のひとつの重要な拠点が津堅島と知念半島であり、知念村には独立混成旅団砲兵隊が高射砲、重砲陣地を築いていた。

港川上陸に備えては、玉城村系数城址いとかずが重要な拠点だった。城址からは港川一帯が一望の下に見下ろすことができ要塞にうってつけだった。

この系数城址には独立混成第一五連隊約二〇〇〇人が美田千賀藏大佐ちかざうに率いられて駐屯していた。それを一般に美田部隊と呼んでいた。この連隊は本部半島の防備についた宇土部隊宇土大佐の第四四旅団に編成されていた。それで、本部村で防衛隊員として召集をうけた女子青年達二、三〇人が、軍の炊事係として使われていた。さらに、連隊そのものが、地元の多数の人たちを防衛隊員として召集し補強していた。

城址中腹に港川方面へ砲口を向けた戦闘指揮所（二、三〇人収容可能）が丁字形に岩盤をくり抜いて構

築されていて、美田連隊長はそこを根城にして、作戰會議などを開いていた。一般兵約二〇〇〇人は城址の各所の岩陰などを利用して作った小屋で防備にしていた。糸数部落の西側の崖上に軍経理室壕を設置して、在郷軍人分會長A氏宅を軍炊事場として使用していた。美田部隊の主要兵器は連射砲だった。

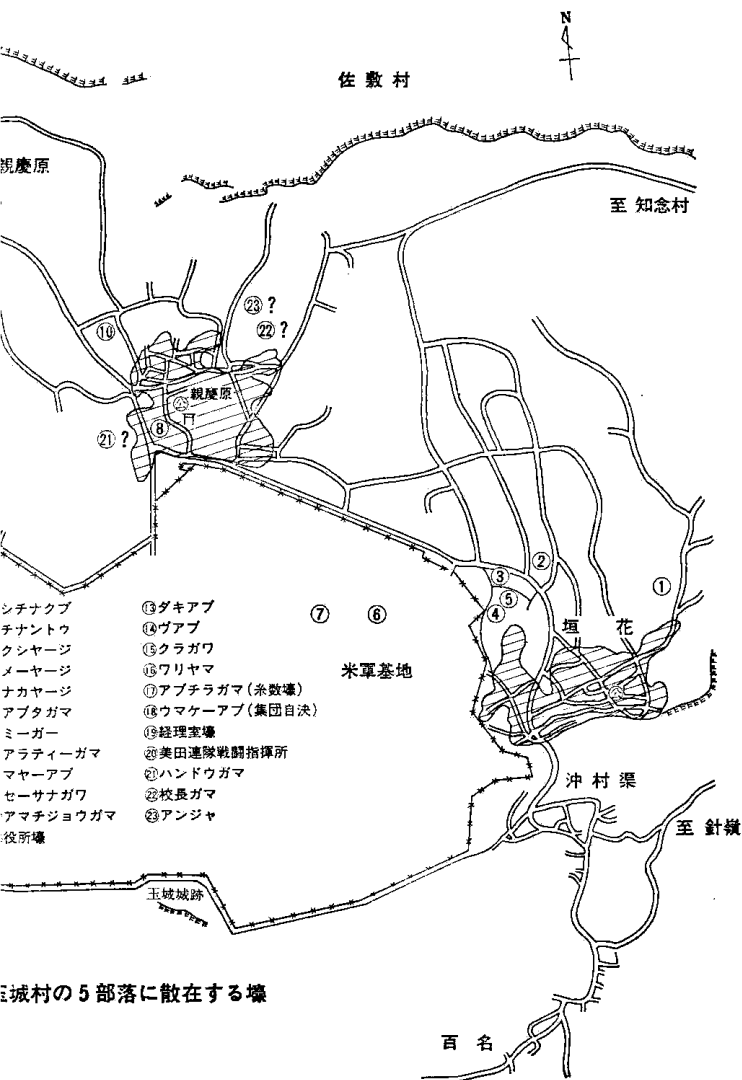
部落東はずれに自然大洞窟があり、その中に南風原^{はえばる}陸軍野戦病院の分院が、沖繩戦突入後まもなく設置された。

沖繩戦突入直前の糸数部落の人口は九〇戸、四六〇〜四七〇人だった。その大多数の住民が部落北はずれの「アブチラガマ」(糸数自然洞窟)に避難していた。部落西はずれの「ウマケーアブ」と名づけられている小さな自然洞窟にも約二〇人ほど避難していた。

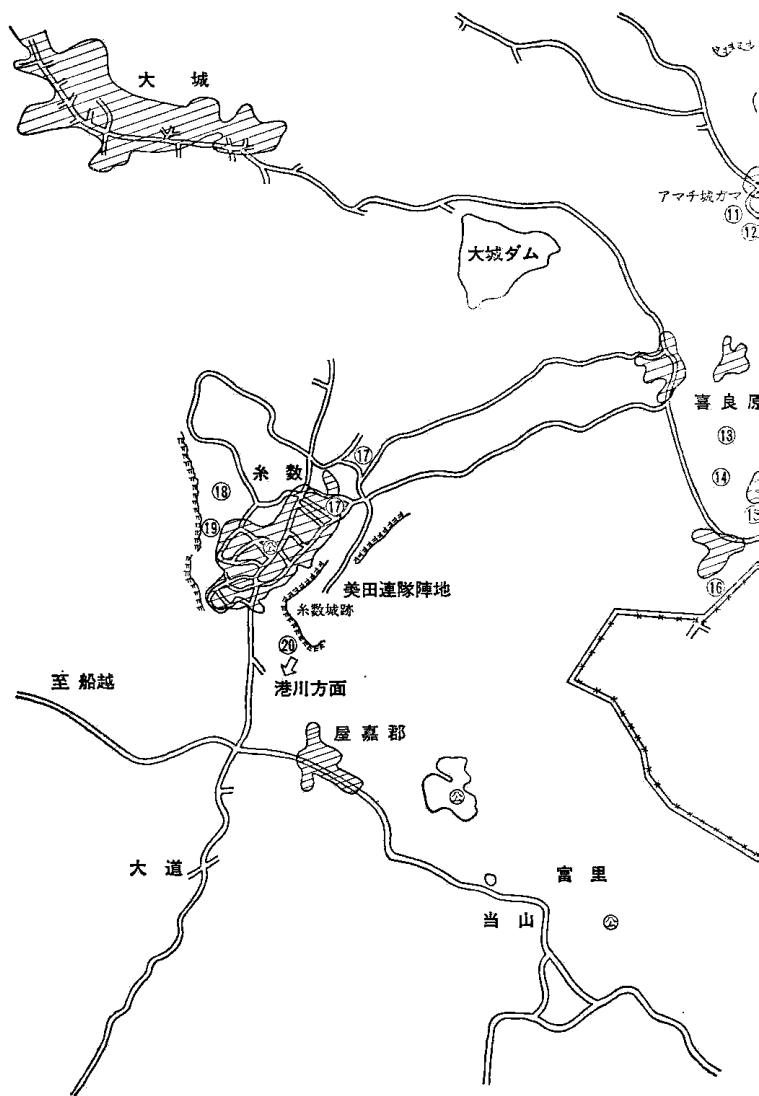
(2) 自然洞窟の避難場所

沖繩本島の南部地方は珊瑚礁が隆起して形成された地形上、各所に自然洞窟がある。特に玉城村、知念村、具志頭村一帯は縦横に自然洞窟が広がっている。その洞窟内には地下水が流れていて海にそそいでいる。

洞窟は、その入口が広いところもあれば、家屋敷の何気ない裏庭の一角がその出入口になっている場合もある。そのうえその洞窟を一〇メートルも潜り込んでいくと、突如大広間になっていたりする。そのような自然洞窟の上に集落が形成されている場合もある。したがって、米軍が沖繩占領後基地建设して水洗便所を使用するようになったとたん、部落の由緒ある共同井戸が使用不能になった例が、



第1部 皇軍と臣民の末路



玉城村仲村渠部落にある。最近、都市化の波は南部農村地域にも押し寄せてきて、水洗便所の使用が増加した。洞窟地帯のこれらの地域では、洞窟が自然下水道となって海に直結して、海水を汚染しはじめている。

第三二軍は、本島南部を決戦場にしたので多数の住民を巻き添えにして熾烈な戦闘がそこで展開された。戦闘が終結してみると、「鉄の暴風」と形容されるほどの弾雨が降りそそいだ割には、多数の将兵、住民が生きのびていた。その多くは、自然洞窟に身を潜めていたおかげで辛うじて助かったのである。

当時、玉城村役所吏員だった大城佐清さん（現在六九歳、農業）は、沖縄戦突入直前、住民の避難対策の仕事をしていた。

役所職員には軍への食糧供出、避難壕割り当て、負傷者に対する薬品の手配、壕内でお産した妊婦への産婆の配置等々、避難生活中の住民生活にいろいろな配慮が必要だったので、村長が軍に交渉して、義勇隊、防衛隊召集から免除するようにしてあった。

大城佐清さんは、玉城村垣花（当時、親慶原、下親慶原は垣花部落だった）一帯の自然壕へ、住民を配置してきたので、この附近一帯の自然洞窟の位置と住民の配置状況についてかなりくわしい。糸数部落については当時玉城村役所吏員でもあり、在郷軍人分会長でもあったAさん（現在六三歳、戦後村会議員、農業）がくわしかった。

二人の証言に基づいて垣花、親慶原、下親慶原、喜良原、糸数各部落の壕とその名称を地図に記入することができた。（図参照）